

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1754号 2004年11月08日(月)

《 starting second term 》

接戦のように見えながら、実はかなりの「実力の差」をもってブッシュ大統領は民主党のケリー候補を打ち破り再選された。ブッシュの二期目がスタートする。

「実力の差」とは何か。それは、獲得した選挙人の数、総得票、そして議会選挙の結果の三つである。第一の選挙人の数を見ると、最後に結果が判明したアイオワ州の7がブッシュに流れて、最終的な獲得数ではブッシュが286人(31州)、ケリー252人(20州)となった。ケリーが敗北を認めた時点では獲得選挙人の差はわずか「2」で「接戦」のイメージがあったが、最終的結果は30票を上回る差。ケリーが早々にブッシュに電話して敗北を認めたのは賢明だったと言える。

選挙人の数ばかりでなく、総得票ではブッシュが5960万票とケリーの5611万票を約350万票も上回った。敗北したゴアが前回2000年の選挙ではブッシュを総得票で50万票上回っていたのと比べると、400万票も票がブッシュにスイングしている。選挙に行く人間の数を増やし、総得票を増やすというブッシュのカール・ローブを中心とする選挙対策本部の勝利だ。議会も民主党のダッセル上院議員が落選するなど共和党に大きく振れた。

良い悪いの問題ではなくて、よく言われるようにアメリカ国民は迷ったのではなくて、結果を見れば明確にブッシュを支持した。二つに割れた面はあったかもしれないが、ブッシュを支持した人の方が圧倒的に多かったのである。その意味を我々は理解する必要があるし、今後のアメリカを考える上で前提に置くべきだろう。アメリカの大統領選挙には、同国が世界に君臨する大国であるが故に、「我々も一票持ちたい」という思いは世界中にあったし、実際に投票を行ってみたところもある。

そうした世界における番外編の米大統領選挙の結果は、「ケリーの圧勝」だった。それが本家本元のアメリカでは「ブッシュの圧勝」。これは良く考える必要がある。世界の世論とアメリカのそれは齟齬している。ではどういう人がブッシュを支持したのか。

ロンドンに出張途中の飛行機の中で読んだデーリー・メールには興味深い分析があった。

1. 投票者に選挙でもっとも重要だと思った問題をランク付けしてもらったら、もっとも多い22%の人が「moral values」(中絶問題とか同性結婚問題など)と答え、そのうちの79%の人がブッシュに投票した

- 2 . 経済・職が一番重要と答えた人は20%で、そう応えた人の80%はケリーに投票した。テロリズムと答えた人は19%で、そう答えた人の86%はブッシュに投票した
- 3 . イラクが一番重要な問題と答えた人は15%しかおらず、そのうちケリーに投票した人は74%を占めた。あとは、医療(8%)、税(5%)、教育(4%)だった

つまり明らかなのは、ケリーは選挙民の問題意識の所在を全く見誤っていた、ということだ。ブッシュはこの「moral values」の問題に最初から積極的に発言し、各種の団体から支持を取り付け、その支持団体が一番熱心にブッシュ再選で動いたと言われる。私の記憶では、ケリーはこうした問題についてほとんど発言をしなかった。同性の結婚に反対とも言わなかった。

ケリーが一番熱心にブッシュを攻めたのはイラク問題(第一回の大統領候補問題の課題)だったが、選挙民はそれを4番目に重要な問題としか考えていない。イラク問題ではケリー支持に選挙民は動いたが、その問題に絡む直ぐ上の3位のテロリズムではブッシュ支持が圧倒的。ケリーは「we can do better」(我々の方がうまく出来る)と言ったが(指名受諾演説) 選挙民から信頼してもらえなかったということだ。

《 Who is next Blair for Democrats ? 》

今から考えると、ケリーがブッシュを打ち破れるベースがあったとしたら、やはり経済にあったといえる。例えば最低賃金の問題がディベートで取り上げられたときに、ケリーは明確に最低賃金の引き上げに賛成を表明した。対してブッシュは、答えとしては論理的には合っているのだが「教育が重要」という話をした。しかしあれでは選挙民には分からない。ブッシュには不利だった。

あの時点でケリーがアメリカ経済を良くする具体的な図式を示せていたなら、選挙民のケリーを見る目が少しは違っていたと思う。しかしケリーにはその見取り図が描けず、示せなかった。彼が経済で標語に選んだのは「help is on the way」(国民の皆さん、助けが来ますから)だった。これでは何時の民主党かと思う。

つらつら思うに、やはりケリーは古い選挙を戦ってしまったのだと思う。クリントンのような斬新さは彼にはなかった。上院議員を何十年としている。かつ奥さんは、回り合わせの問題は別としてアメリカの大富豪の富を受け継いでいる。ほとんど父を知らないようなクリントンとは違う。最初に彼の勲章として語られたのは、ベトナム戦争での戦勲だった。しかし、いったいベトナム戦争とはいったい何年前の話だったのか。ケリーの選挙戦は最初から古きばかりを訪ねた。未来図がなかったのである。

国際的に人気のないブッシュがなぜ勝ってケリーが負けたのか。イラク問題では、アメリカ人もブッシュにはうんざりしていた。それは確かだと思う。デーリー・ミラーの調査でも明らかだ。しかしアメリカ国民はイラクなんかの問題より、

「中絶に賛成するのか、反対するのか」

「同性愛者の結婚を認めるのか認めないのかなどを通じて、家族の価値をどう考えるのか」

の方がこの選挙では重要だと考えた。最近の英語の新聞には中西部で地味な厳しい生活をしながら教会に通って良い時代の到来を待つ家族が頻繁に登場する。夫婦二人、子供三人、四人といった家族だ。ブッシュに投票した典型的な人々としてマスコミが取り上げているが、彼らの生活は我々海外の人間が想像する都会のアメリカ人の生活からはかけ離れている。しかし、アメリカではそれがマジョリティなのだ。つましい生活、退屈な生活をしながら、教会に行って祈る。宗教的モラルを大切にする。

世界のブッシュ嫌いと、アメリカ国民のブッシュ愛の溝はここにある。「pro-life（中絶反対）か、それとも pro-choice（中絶賛成）」のような、世界ではあまり論議もされないような問題（良い悪いの問題は別にして日本を見れば明確だ）でアメリカの政治の方向が決まっている、ということを理解することは重要である。

デーリー・ミラーにはもう一つ面白いことが書いてあった。「毎週のように教会に行く信心深い人は、2対1の割合でケリーよりもブッシュに票を入れた」と。アメリカはその物量の豊かさ、広く認められた自由、広範なデモクラシーなどのウリにもかかわらず、我々が考える以上に「極めて宗教臭のする国」である。

デーリー・ミラーには、ケリー陣営の戦略的ミス以上にブッシュの第一回討論での惨めな出来をテーク・チャンスできないケリーの個人的資質や、奥さんのテレザ夫人が引き起こした問題にも触れていて興味深い。

それによると、ブッシュ陣営は第一回の大統領候補討論で同候補のできが極めて悪かったことに一時大いに動揺したという。しかしケリー陣営はそれ以上の問題を抱え、ブッシュが示した弱さにつけいる力はなかったという。ケリーは意見の違う専門家の意見を両方聞くようなところがあり、これが様々な問題で「立場がぶれている」とブッシュ陣営から攻められる背景になったという。

またテレザ夫人は最初から予想されていた以上に感情の起伏が激しく、常に周囲から注目を集めようとして、ケリーもその対処には困っていた面があったという。放言癖でも知られ、ブッシュのローラ夫人の職歴を忘れて、「彼女は何ら仕事らしい仕事をしていない」と言って直ぐにこれを否定せざるを得なかったのは記憶に新しい。

イギリスの新聞だから、記事の中には「米民主党は、既にブレア探しに奔走している」という文章もあった。米民主党にとって「ブレア」に相当する人物がエドワーズなのか、ヒラリーなのかは分からない。もっと新しい人が登場してくるかもしれない。しかし、ケリーだけではなさそうだ。

《 dollar in a southbound 》

二期目のブッシュ政権はどうか。それはまだ予想の範囲を出ない。この週末の新聞記事を読んでも、誰が辞めて誰がなるをはじめとして数え切れないほどの予想がある。しかし大所を抑えておく必要があると思う。

- 1 . 通常、二期目の大統領は最後であるが故に「歴史に残る大統領」を目指すものである。最後の最後に中東和平に熱心だったクリントンもそうだったし、レーガンは堅い信念の下に徹底してソ連と対抗した。そして任期後、ソ連を打ち破った大統領としての地位を得、今でも歴史的な大統領として讃えられる。ブッシュも狙いはレーガンだろう
- 2 . その意味で、ブッシュの政権も一期目とは少し様相を異にする可能性がある。一期目は「compassionate conservatism」を議論するまもなく9 . 11のテロが起きて、これが一期目のブッシュ政権を規定した
- 3 . しかし、二期目はテロを予想しながらも、もうすこし計画的なことが出来るはずである。外交問題ではイラクに加えて北朝鮮、イランなどが浮かび上がる。経済では財政赤字を減らしながらいかにしてアメリカ経済の成長を持続させるかに注力することになる
- 4 . しかし全体的に言えることは、ブッシュ政権を取り巻く環境は厳しいと言うことであり、最近の大統領選挙を控えての、そしてブッシュが当選した後でのドル安はアメリカが直面する問題の深さを予言している

といえるだろう。ニューヨークの株だけが勢いよく上げているのは、「business-friendly」という単語が投資家の耳に心地よいからである。しかしドルが抱える問題は深刻だ。先週金曜日のニューヨーク外国為替市場では、10月に非農業部門の就業者数が33万7000人の大幅な、力強い伸びになり、FOMCの利上げが今後も続くとの見通しに関わらず、ドルが特にユーロに対して大きく下げて安値では1 . 2967ドルを付けた。引けは1 . 2964ドル。

雇用がこれだけ伸び、アメリカの利上げが続くとの予測の中でのドルの下げは、同通貨が抱えている問題の深さを示している。それはこのニュースで伝えてきた通りである。双子の赤字そのものより、市場がそれに関心を払い始めたことが大きい。ブッシュだとドル高との予想の人もいたが、アメリカの抱える問題はそれほど簡単ではない。ドル・円は100円に向けてゆっくり円高が進むだろう。

今週の主な予定は以下の通り。

11月8日(月)

B I S月例中央銀行総裁会議

11月9日(火)

10月マネーサプライ

11月10日(水)	10月景気ウォッチャー調査 10月工作機械受注 9月国際収支 9月消費動向調査(全国・月次) 9月特定サービス産業動態統計(速報) FOMC 米9月卸売在庫 米10月貿易収支 米10月月次財政 米9月シカゴ連銀製造業指数
11月11日(木)	10月国内企業物価指数 9月機械受注 米債券為替市場休場(ベテランズデーのため)
11月12日(金)	7-9月GDP(1次速報) 9月鉱工業生産(確報) 米10月小売売上高 米11月ミシガン大学消費者信頼感指数(速報)

《 have a nice week 》

実に久しぶりにロンドンに来ています。ベルリンにはユーロ紙幣が出るときに来ましたが、イギリスはユーロとは関係ない。そのときもとんぼ返りでした。まだよく見ていませんが、ロンドンも相当変わったようで、それが見られれば良いと思います。こちらで会う予定の人は昔からのお馴染みさんが多いようで、これも楽しみ。

ところで、いつも中国や韓国などアジアや北米に行く時にはAUのグローバル・パスポートをもって行くのですが、イギリスでは使えないので「電話はどうしよう」と悩みながら成田に着いたのです。で、イギリスに強いと思われる第一ターミナル一階のボーダフォンでちょっと話をしたら、まさにぴったりの機種があり、悩みも解決。

V801SHというシャープの機種でしたが、私にとってこの機種は海外に持ち出すケイタイに期待することの約90%が出来る。メール(日本語)の授受、ネットの検索、そして通話。ロンドンで打ったケイタイ経由の日本語メールが、時間をおかずに東京の宛先(携帯でもネットでも)に着き、その返事が返ってくるのを体感するのは素晴らしい。日本人がいく85カ国、93%をカバーしていると書いてある。だから無論使えるのはイギリスだけではない。

ネット情報も非常に充実している。日本の新聞、海外の新聞もほぼすべて読める。バンキングやネット証券サイトにも対応している。私もまあ番組とか、やはりいろいろやっています。

すから、連絡というのは多いわけです。で、電話をもらうより携帯にメールを入れてもらった方が楽です。対応できる時間を選べますから。ボーダフォンですから、「@t.vodafone.ne.jp」の前に私がいつも使っているハンドル名を入れると、直ちにロンドンの私の携帯に日本語メールが届きます。これは使えるという印象。料金はちょっと高いかも。

二つ不満がある。リモートメールが使えないこととボーダフォンの機種にドコモのメモリーを移植できないこと。この二つとも「そうである」という確信はないが、どうも出来なさそう。後者は店頭の女性に言ったら、「今まで出来たことはありません」と。これが出来るとボーダフォン機種の使い勝手は数段上がるのに。

この電話は、日本でも使えるのです。モードを日本にすれば。面白いのはこの携帯を持ち出した先で「海外モード」(F20 かな)に転換すること。コンピューターのリブートのような操作をする。そうすると、自動的にその地での最適ネットワークを検出して、メールの送受信、ネット検索ができるネットワークと繋がってくれる。ほんまに世の中便利になる。

それでは皆様には、良い一週間を。

《当「ニュース」は、住信基礎研究所主席研究員の伊藤 (E-mail ycaster@gol.com) が作成したものです。許可なき複製、転送、引用はご遠慮下さい。また内容は表記日時に作成された当面の分析・見通しで一つの見方を示したものであり、売買を推奨するものではありません。最終的な判断は、御自身で下されますようお願い申し上げます》